

※クリックすると記事のページを開きます。

① 2016 年度派遣（2017 年 2 月）	2
-プログラム概要	2
-プログラム参加報告 1：人とつながる勇氣.....	3
-プログラム参加報告 2：小説の舞台に立って	6
-プログラム参加報告 3：カンボジアでの学校生活	8
-プログラム・インタビュー 1：心の強さが違う	10
-プログラム・インタビュー 2：理解できないようなことが起こっても、それがその国なのかなって思える.....	12
-プログラム・インタビュー 3：「大学でやったことはカンボジア」と言えるきっかけに.....	15
②2017 年度派遣（2018 年 2 月）	18
-プログラム参加報告 1：深い海を遊泳できるまで	18
-プログラム参加報告 2：カンボジア、満ち満ちるもの	21
-プログラム参加報告 3：初めてのカンボジア	24
-プログラム参加報告 4：友達としてのつながり	28
③2018 年度派遣（2019 年 2 月）	31
-プログラム参加報告 1：出会いと別れを大切に作るカンボジア.....	31
-プログラム参加報告 2：エネルギーに満ちた国 カンボジア.....	33
④2019 年度派遣（2020 年 2 月）	36
-プログラム参加報告 1：百聞は一見にしかず	36
-プログラム参加報告 2：私が二週間で得た経験.....	39
-プログラム参加報告 3：尊敬の国	42
-プログラム参加報告 4：カンボジア語を学ぶ意味	45
-プログラム参加報告 5：実際に見て聞いたカンボジア	47
-プログラム参加報告 6：カンボジア語を学ぶということ	49
⑤2020 年度派遣（2021 年 2 月）：オンライン短期留学実践報告.....	51

① 2016 年度派遣（2017 年 2 月）

-プログラム概要

王立プノンペン大学（RUPP）へのショートビジットは、本学で地域言語 A（カンボジア語）を履修する 2 年生を対象に 2 週間の予定で行っています。単なる語学研修ではなく、国文科 2 年次の正規授業に参加します。カンボジア人の大学生とともに学び、休み時間もともに過ごすことで、カンボジア語の運用能力やコミュニケーション力を養うだけではなく、カンボジアという地で、同じ学生という立場から、いろんなことを発見し、考えていく力をつけることを目標としています。RUPP は 2 学期制であるため、第 2 学期の最初にあたる 2 月初旬にショートビジットを行っています。

このショートビジット・プログラムは、1. 冬学期集中講義（TUFS）、2. 国文科講義（RUPP）と学外研修、3. 研修報告（TUFS）、の 3 つから成り立っています。

2017 年は、冬学期に 4 日間集中（15 コマ）で、国文科 2 年の教材を使い、必修科目である「インド文学」「意味論」「パーリ語」「碑文」「前アンコール期・アンコール期の文学」「東南アジア文化論」「サンスクリット語」の 7 科目を予習しました。

カンボジア滞在中は、午前中（7 時～12 時）は、上記の授業を受講し、午後は、世界的に有名なカンボジア人映画監督リティ・パン氏が運営するボパナ視聴覚資料センター、カンボジアの国語辞典を編纂した僧侶チュオン・ナート（1883–1969）が活躍し、また近代文学作品の舞台ともなっているウナロム寺院、プノンペン由来の場所とされるワット・プノムの丘、アンコール王朝などの彫像が収められている国立博物館、ポル・ポト時代の悲惨さを伝えるトゥオル・スラエン戦争博物館や郊外にあるキリングフィールドで、カンボジアの文化と歴史に関する研修を受けました。また映画鑑賞、料理教室、伝統楽器の演奏も体験し、週末には、カンボジア人学生や先生たち、TUFS 卒業生とともに、郊外にある遺跡の碑文を見学しました。なお、2017 年のプログラムは、大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）により、カンボジア人教授による引率支援を受けました。RUPP には留学生用の寮がないため、参加者はホテルに滞在しました。

帰国後は研修報告書を作成するとともに、語学力の判定を受けることで、学んだことや考えたことを、自分でもう一度整理し、今後のカンボジア語の学習や研究テーマの方向性を定めます。

-プログラム参加報告 1：人とつながる勇気

平澤萌里

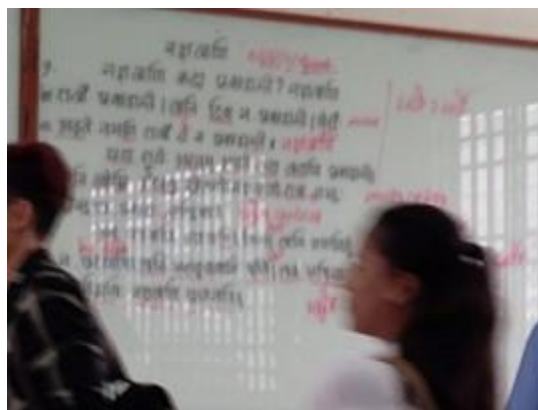
◇集中講義で準備

ショートビジット前の集中講義では、留学先の授業内容の予習をしました。4日間 15コマを使ってカンボジア人の先生とカンボジア語で書かれたテキストを読み、留学先の授業を受ける上で必要な単語を覚えたり、まとまりのある文章を読む練習をしたりしました。また、集中講義の終わりには留学の目標を立て、私は、①授業内容が一部でも理解できるようになる、②最低1日1回はカンボジア人と話す、③友達を作る、としました。初めての留学で楽しみな反面、集中講義で学ぶほどにショートビジット先の授業についていけるだろうかという不安が大きくなりました。

◇授業に参加

王立プノンペン大学では、2週間でインド文学、意味論、パーリ語、碑文、サンスクリット語、東南アジア文化、前アンコール・アンコール文学を学びました。インド文学の1週目は主に南アジアから西アジアにかけての地図やインダス文字の写真をしながら授業が進められました。2週目はインドの世界創造に対する考え方について学びましたが、配布資料の内容が難しく、あまり理解できませんでした。周りのカンボジア人学生も理解に苦しんでいるようでした。意味論の授業では予習で使用した資料と同じものを使っていたので、容易に理解できました。パーリ語とサンスクリット語については、予備知識がほとんどなかったので、とにかく板書を写して見様見真似で音読をしました。碑文の授業の1週目には文字表記の変遷を学びました。板書が多かったのでわかりやすく、文字の成り立ちが分かったので非常に興味深かったです。2週目には実際に碑文を読みました。東南アジア文化の授業では、東南アジアとは何かを学び、前アンコール・アンコール文学の授業では歴代の王について学びました。

授業全体を通して、少なくとも主題を理解することはできました。予習したことが大いに役立ち、勉強してきたことが授業で扱われると、心の余裕が生まれるとともに、より理解を深めることができました。しかし、授業始めの先生の雑談やたとえ話となると聞き取りき



サンスクリットの授業の板書

れないことがほとんどでした。

ショートビジット中、一日だけ授業に代わって、中国企業によるカンボジアのダム建設支援の報告会が行われました。学生は配布された T シャツを着て参加しました。報告会では、ダムの電力生産状況や、環境への配慮についての話がありました。中国のカンボジアへの影響力や強い働きかけを肌で感じた一日でした。

◇友人たちと

友人関係においては、私自身成長できたと感じています。授業初日は先生に連れられて教室に入り、ショートビジットの仲間同士で固まって座っていました。緊張のままに一限の授業が終わり、30分の中休みに入りました。このまま座っていてはだめだと思い、意を決して3、4人で談笑している女の子たちに話しかけてみました。緊



お世話になった友人たちと

張が最高潮の状態で、「こんにちは。私の名前は平澤萌里です。2週間ここで勉強します。宜しくお願いします。」と一息に言うと、突然に話しかけられて驚いたようでしたが、今度は向こう側からいろいろと質問をしてくれました。休み時間の終わるころには、私の周りに10人余りの人ばかりができていました。これほどにも積極的に人とつながるために働きかける経験をしたことはなかったのでかなり勇気がいりましたが、これでまた一つ成長できたと感じています。2日目以降はそれぞればらばらになって座り、私は教室の左側の前から3列目に座りました。左側には男の子2人、右側には女の子3人が座っていました。特に両隣の子には大変お世話になり、私が書き間違っていると教えてくれたり、先生の話が分かるか聞いてくれたりしました。

◇学外研修

授業時間外にもカンボジア文学や文化の知識を深めることができました。カンボジアに関する世界各国の映像資料が集められているボパナセンターでは、伝統舞踊の稽古の映像を見ました。ウナロム寺院は文学的に重要な寺院で、カンボジア初の近代小説と言われる『ソパート』にもその名が登場し、国語辞典を編纂したチュオンナート僧侶が居住していた寺院でもあります。その寺院では、お祓いを体験しました。また、伝統楽器も体験しました。ロニアトと呼ばれる鍵盤が竹製の小さな木琴で、地面に座って演奏します。一回2時間の練習を2回行い、簡単な曲の前半まで演奏できるようになりま

した。郊外の遺跡、サンボープレイクックでは、レンガ造りの建物の精巧なレリーフや内部を見学し、古の都に思いをはせました。

◇成長できたこと

今回のショートビジットを通して、カンボジア語能力の向上と、知識の深長、人の輪に入っていく勇気を得ることができました。渡航前の集中講義も含め、ネイティブのカンボジア語を聞く機会を多く持ち、聞き取り能力が向上したと感じています。カンボジア人同士の雑談は聞き取れることもあればわからないこともあります。授業内容を理解することはできるようになりました。また、アカデミックな文章を読む経験も持ち、文学や文化に関連する語彙を増やすことができました。また、インド文学やインドの言語を学べたことは新鮮でした。カンボジアは文化・文学的にインドの影響を強く受けていることは知っていましたが、今まで勉強する機会がありませんでした。現在のカンボジア文学の基礎となる文化や文字について勉強したことは、今後カンボジア文学を深く理解するのに有意義だと考えています。また、教室内で友人関係を築く過程で、自ら働きかける経験を得られ、精神的にも成長できたと思います。

-プログラム参加報告 2：小説の舞台に立って

井上令菜

私にとってカンボジアを訪れたのはこのショートビジットプログラムが2度目だった。前は観光を目的とした旅行だったので、今回はカンボジア人とより多く交流しカンボジアの現在の文化や風習に実際に触れることを目標とした。そんな私にとって王立プノンペン大学の文学部で学ぶ機会を得たのは非常に恵まれた経験だった。2週間の滞在で特に記憶に残っているエピソードを2つ紹介する。

◇クラスメイトとの交流

1つ目は大学のお昼休みのことだ。私たちが大学で授業を受ける最後の日にクラスメイト達と一緒にお昼ご飯を食べようと誘ってくれた。そして食堂でお弁当のようなものを作ってもらい学内にある大きな湖のほとりで食べることになった。周りには同じようにしている生徒が複数組いてこれが大学の日常風景のようだった。クラスメイトの一人に聞いてみると、プノンペン大学の学生ではなくてもここに入ってくることができ、皆ピクニックをしているという。その風景はのどかで、いつの間にかお昼に誘ってくれた生徒以外のクラスメイトも集まってきていて、突然縦笛を取り出して演奏したり、周囲にけしかけられて歌いだしたりしていた。まだ十分に意思疎通を図ることも難しかったけれど、このとき何とも言えない幸せを感じた。カンボジア人のクラスメイト達は外国人の私たちに対して特別丁寧に接してくれたり、気遣ってくれたりしてくれていて、その優しさを非常にありがたいと感じながら、それでも対等に接することができないことへの歯がゆさをかみしめていた。だが、このときは同じように笑って楽しい時間を共有できていた。だからこそこの上ない幸福を感じ、かけがえのない思い出となった。この楽しかったときの事を思い出すたびに、私は幸せな気持ちになると共にもっとカンボジア語の能力を高めて彼らと共有できるものを増やそうと心に誓う。



クラスメイトとのランチ

◇小説の世界を体験

もう1つのエピソードは大学での授業が終わった後にウナロム寺院に訪れたときのことだ。このウナロム寺院は日本での授業で読んだカンボジアの現代小説に出てくる有名なお寺だった。そのお堂の中に花を浮かべた水を入れた金の器が置いてあった。これも日本で読んだカンボジア小説の中の話だが、私はこの器を知っていた。ヒロインが病気を治してもらう場面で使用されていたものに非常に似ていたからだ。きっと器の中の花が浮かんでいる水は仏教の中で尊いとされる聖水だろう。引率をしてくださった教授にお願いしてその場にいたお坊さんに、物語の中と同じように健康祈願の儀式をしてもらった。見様見真似で、お坊さんにお祈りをしてもらうことができ、その証のように右手首には赤いミサンガのようなものを巻かれた。この時私は自分が物語の登場人物と同じことをしてもらったことに感動をおぼえた。先生方からお話を聞いて物語を想像するだけでなく、実際に自分の目で見て体験することによって、そのカンボジア小説に親近感を覚えることができた。カンボジアでしかできない体験をしたことは私にとって非常に貴重な経験となった。



儀式用の器



健康祈願の儀式

-プログラム参加報告 3：カンボジアでの学校生活

堀口みのり

◇イメージの変化

わたしにとって、今回のショートビジットが人生で初めてのカンボジアだった。授業で学んだり、テレビで観たりしたことしかない自分の専攻地域。わたしが中学生以来勝手に描いていた「途上国」というイメージは一気に無くなった。もちろん地方に一度、出かけた時には、これまでのイメージ通りのところもあったが、それだけがカンボジアではないのだと思い知らされた。それほどわたしが滞在した首都プノンペンが発達していたのだ。



◇日本文化紹介のアルバム

2週間、王立プノンペン大学（RUPP）の国文学科2年生のクラスでカンボジア人学生とともに授業を受けた。正直なところ、私はカンボジア語には全く自信がなかった。RUPPで受講する講義については、出発前の集中講義で予習してあったのだが、その時点ですでに内容は良くわからず、今までの自分の勉強不足を悔やんでいた。それ以上に、そもそもクラスメイトたちと会話ができるのかという不安も抱えたままだった。

学校生活 1日目、1時間目が終わり、休み時間になった。カンボジア語で話しかける勇気もなくじっとしていた。しかしショートビジットに参加している友人たちがクラスメイトたちに話しかけているのを見て、黙ってはいられない、と思った。日本文化紹介のために作っておいたアルバムを活用して話してみたところ、多くの学生が日本に興味を示してくれた。いろいろ質問されて、それに答えるうちに少しずつ会話が弾んでいった。翌日からは簡単な挨拶ぐらいは積極的にできるようになり、クラスメイトたちも話しかけてくれるようになった。

◇クラスの一員として

3日目からは、隣に座っていた1人と仲良くなり、授業でわからないところは、一生懸命説明してくれ、また彼女の説明が不十分だと他の人が補足してくれたりした。カンボジアの学生は親切で、教えることを楽しんでいるようにも思えた。と同時にクラスの一員として受け入れてもらえた実感した。困ったときには助けてくれる友達がいる安心感と、せっかく教えてくれているのだからきちんと理解したいという気持ちで、自分の中でも授業に対する意識は高まっていった。また、クラスメイト

の中には、これは日本語でなんと言うの？という質問をよくしてくれ、いつも助けてもらっている日ごろの恩返しができれば、と日本語を教えられたのも貴重な経験だった。休み時間に食堂に誘ってもらって、カンボジアの学生と同様に食事ができたことも忘れられない。

◇碑文にふれて

授業の中で最も興味を持ったのは碑文の授業だった。授業自体は大変難しかったが、日帰り研修で実際にサンボール・プレイ・クック遺跡に行ったときに碑文を見て、これを読み解いて、理解出来たらカンボジアでの遺跡巡りはどんなに楽しくなるだろうかと思った。

クラスメイトに囲まれて学校が楽しいと思い始めてからは、時間が過ぎるのがあっという間だった。1 番お世話になったクラスメイトには、自作の日本語の教科書を作ってプレゼントすると、後日、「あ い う え お」と書いたものを送ってくれて、涙が出るほどうれしかった。

◇人とのつながりを大切に

今回のショートを経て、これまでよりもさらにカンボジアが好きになり、またもっとカンボジアについて学びたいと思った。この機会にできた人とのつながりを大切にしていきたい。



-プログラム・インタビュー 1：心の強さが違う

平澤萌里さん

(国際社会学部)

高校 2 年生の時に高校の姉妹校だったタイ北部の高校に一週間程行き、今まで知らなかった東南アジアに触れて、タイの地域研究がしてみたかった平澤萌里さん。国際社会学部東南アジア第 2 地域で受験して、振り分けられたのはカンボジア語専攻だった。1 年次には旅行でカンボジアへ行ってみたり、「カンボジア語もやって、結果的には視野が広がってよかったかな」というポジティブな平澤さん。これから休学して、国際交流基金アジアセンターの日本語パートナーズでタイに派遣されることにも、あまり不安はないそうだ。ショートビジットで体験したカンボジアについてお話を伺った。

今回ショートビジット（以下 SV）に行ってみようと思ったのは？

カンボジア人の中に自分が混じって、勉強したりする機会が欲しくて、SV に参加しました。自分の力試しという意味合いもあります。主な目標は、授業内容が理解できたらいいなというのと、最低 1 日 1 回はカンボジア人と話す、友達を作ることでした。

実際行ってみてどうでしたか？

「授業内容が理解できる」というのは、先生の言っていることが 100%理解できたわけではないんですけど、雰囲気とか、板書で今何をやっているのか、というぐらいに。意味論の授業は、話している単語とその意味の関係についての学問で、集中講義で予習した範囲をそのままをやっていたので、理解度はかなり高かったです。碑文の授業は面白かったですね。文字の成り立ちがわかって、現在のカンボジアの文字がどうやってできてきたのかがわかって、「へえ」って思うことが多かったです。

目標にあった、「カンボジアの学生の生活スタイルを見たい」というのは？

授業を受けるだけでも一緒にすることができて、どういう雰囲気で勉強しているとか、人間関係とかがわかったのが良かったです。みんなけっこうふわっとしている感じで、ゆるい感じで。カンボジアの大学だとけっこう、みんなで楽しくって感じです。外大のカンボジア語科はけっこう暗い感じで...（笑）。

授業以外にはどんなことを？

伝統楽器を習ったりしました。木琴のような竹の楽器、ロニアットを。1 年生の時にカンボジアに来た時、王宮で楽団の演奏を観たことがありました。最初は基礎練習しかさせてくれなくて、ひたすら等間隔で打つことを 2 時間くらいやらされました。次の 2 時間でちょっと曲をやって、同じパートをずっと弾き続ける（笑）。でも楽器に触れられてよかったです。

それから、ウナロム寺院に行った時にお祓いをしてもらって、赤いミサングを着けてもらいました。カンボジア人がみんな赤いミサングを着けていて、今までそれは一体何なんだと思っていたので、謎が解けてよかったです。

渡航前に私はインド文化とか、宗教の知識があまりなかったので、自分でも仏教とヒンドゥー教の本を読んだりしました。サンボー・プレイ・クック遺跡を観に行く機会があって、その時に自分で勉強して行ってよかったなって思いました。アンコール・ワットとは違う形の遺跡を初めて見ました。レンガ造りでドーム型と言うんですか。中がすごく精密に出来ていて、屋根までレンガで造っていたので、ピラミッドを裏返したみたいにきれいに出来ていました。

この SV で体験したことは今後の人生にどういう強みがあると思いますか？

留学して自分のコミュニティとは全然違うところに行って、そのコミュニティに入る経験をしたということは大きいと思います。1 回（経験）しているのと、していないのでは心の強さが違うかなと思います。カンボジア人の学生が何を勉強しているのかをカンボジア文学だけでも、知れたので、カンボジア人とかカンボジア文化に対する理解が深まりました。それは将来カンボジアに関する仕事とか、そういう知識が要求された時に、安心感になると思います。

卒論とか今後深めていきたいテーマは？

東南アジアの政治について勉強したいなと思っています。まだ未熟な民主主義の中での政治を勉強してみたいです。

SV を考えている後輩へ

プノンペン大学に SV で行けるのは 2 年生の終わりだけなので、行った方がいいんじゃないかなと思います。なかなか行きたくても行けるような大学ではないですから。カンボジア語力は格段に上がりました。学内の集中講義でも留学中でもずっとカンボジア語に触れているし、いっぱい資料も読む。そうすると語い力も上がってくるので、よかったです。

-プログラム・インタビュー 2：理解できないようなことが起こっても、それがその国なのかなって思える

井上令菜さん（言語文化学部）

中学 1 年生から 2 年間、オランダで暮らし、ヨーロッパの地続きの旅行を体験していた井上さん。高校 1 年生の頃から、東京外大に入りたいという気持ちがある中で、ヨーロッパではない地域に行ってみたいと思い、東南アジアはこれから成長していく地域だから、就職する頃にその地域の言語を話せたらいいのではないかと考えたそう。そこで、発展している印象のベトナム、タイ、インドネシアではなく、アンコール・ワットの存在に感動して、カンボジア語専攻に決めたという。王立プノンペン大学国文学専攻へのさらなる 10 か月間の交換留学を前にした井上さんに、ショートビジットの体験を伺った。

ショートビジット（以下 SV）に参加したのは？

カンボジアの大学でカンボジア人の生徒と交流したいというのがあったんです。日本にいても先生がいろんな機会をつくってくださって、交流することはあるんですけど、なかなか大勢の生徒とは関わることはできない。カンボジアにいて実際にどういう生活をして毎日を過ごしているのかが知りたいし、一緒にそれを共有したいなと思ったので、SV に行きました。

SV に向けて一番大きい目標は？

「大学のクラスメートに毎日話しかける」というのが一番大きい目標でした。

2 週間でクラスメートとはどういう関係を築けたんですか？

大体座るところが決まってくるので、座る周りの人と仲良くなったり、その子たちが授業中、いろいろ助けてくれたりとか。すごく優しいので、カンボジア語で質問してきてくれる。必ず最初に「朝ご飯食べた？」というのは聞きましたね。それから『クレヨンしんちゃん』が好きな子が一人いて、「しんちゃんを知っている？」とか。日本の漫画がカンボジア語に直されているのもあって、『花より男子』とか。『ドラえもん』と『クレヨンしんちゃん』は、大学の人たちに聞いても人気でした。多分、テレビでも放送されているらしいですね。

印象的な授業は？

冬期集中講座で事前に日本語で勉強してきたことも多くて一番理解できたのは、「東南アジア文化」で、学んでいてそれ

が一番面白かったですね。「プレ・アンコール期の文化」は、先生が何を言っているのか半分以上分からなかったりしました。印象に残っているのは、パーリ語の授業です。それはお坊さんが来て、黒板に文字と課題の經典の一節とかを書いて、読ませるというのがあったんです。「私」という語には、パーリ語だとすごい活用があって、その活用を先生が書いて、みんなが順番に指されます。最終日ぐらいに「君も読んでみて」って私も指されて（笑）。文字はカンボジア語と一緒にだったので、読むことは何となくできるんですけど、すごい詰まるんで、周りの子が先回りして助けてくれながら、がんばって一節を読んだというのが一番印象に残っています。

滞在中の印象的な体験や見学は？

もともと、どこかの寺院に行きたいと思っていて、ウナロム寺院に行ったんです。ウナロム寺院って『ソパート』（ルム・クン、1938 年刊の小説）に出てくるじゃないですか。実物があるなら、行ってみようという感じで行きました。その時にたまたまお坊さんがいて、健康祈願をしてもらいました。お花を浮かべたお水を、勺でかけられて。それから、王宮に行って、占いをちょっと体験することができたので、そういうことは自分たちだけで行ったらできなかったらうなって思います。占いの結果は、「がんばれば、良い結果が生まれる」でした。

「カンボジアの雑誌を買う」という目標がありました

何となくなんですけど、語いの比較、似ているような意味を現す語いの比較を研究しようと思っていて、その材料になればいいかなと思いました。例えば、「日光」と「太陽」って大体同じようなことを現しているけれど、使う場面が違ったりするから、その違いは何だろう？と。雑誌で cute ってローマ字で書かれていることがあって、これはカンボジア語で「美しい」と言う時とは何が違うんだろう？というのを研究すると面白いかなと思ったんです。実際に雑誌を買ってみて思ったんですけど、cute とかはあまり使われていなかったんで、どの語いにするかというのはよく検討しないといけません。

カンボジアの言語や文化を知った強みは？

これは外大生みんなそうなのかもしれませんが、他の国に行って、理解できないようなことが起こっても、それがその国なのかなって思えるようになったと思います。理解できないほどではないですけど、どこでも自撮りをするとか。後は集合が 7 時って言われたけど、みんな 7 時半ぐらいに来て、そこからなぜか道端のクイティウを買って朝ご飯を食べ始めるとか。7

時集合の意味は何だったんだろう？って。

SV を考えている後輩たちに伝えたいこと

冬期集中講座は授業を理解する上で本当に役に立ったと思います。派遣留学以外ではクラスに入れることはないと思うので、本当に一度にいっぱいのカンボジア人と交流できるので、そこは本当にいいところだと思います。1 年生の時にも旅行で行ったんですけど、その時よりもカンボジア語を使えましてし、ポー先生と一緒に付いてきてくださったのもあって、すごい貴重な、ウナロム寺院のこととか、貴重な体験もいっぱいできたかなと思います。

それから、これは勉強とは関係ないんですけど、帰る日にみんなでクラスメートに何か渡したいっていう時に、クラスメートへのお土産じゃないですけど、5 円玉とかを持っていったら、すごいよかったなって。その時は即席で、折り紙をみんなの分を作って渡せたんです。みんなすごい喜んでくれていました。

-プログラム・インタビュー 3 : 「大学でやったことはカンボジア」と言えるきっかけに

堀口みのりさん（国際社会学部）

難民支援やボランティアに興味があって、中学校の時の世界史の資料集で読んだ「カンボジアに行きました」という小さな報告から、いつか支援に行くならカンボジア語が話せたらと思ったのが、カンボジア語を専攻するきっかけだったという堀口さん。3年生の今年は、卒論に向けて東南アジア経済のゼミに入り、カンボジアの教育について考えていくとともに、サークルの幹部としての一年を送るという。英語がもともと好きで、中学生の時はアメリカに1か月間ホームステイをし、翌年は日本での受け入れも経験した。中学3年生の終わりに地元の宮城で東日本大震災が起こって留学支援が盛んだったこともあり、高校生の時にアメリカへさらに1年間留学した。これまでの国際交流の経験が今回の初めてのカンボジアの滞在にも大いに活かされたという堀口さんに、ショートビジットでの体験についてお話を伺った。

今回ショートビジット（以下 SV）に行ってみようと思ったのは？

ずーっとやっているけど、全然しゃべれなくて、こんなに大変な思いをして勉強しているのに全然身に付いていないんじゃないかみたいな気持ちで。本当に自信がなかったので、経験として行こうぐらいの気持ちで SV に参加したんです。

カンボジアへ行ったことがなかったので、せっかく自分が学んでいるところに行ってみたいと思いました。日本で学んでいるイメージだけだと、全然違いうndらうなって思っていたので。自分で行ってみて実際に現地の人たちと話してみたり、カンボジアという国を改めて知りたいなと思いました。

SV に参加する事前準備は？

毎日ではなかったんですけど、行く前から日記をカンボジア語で書いていました。時間がある時に、辞書を引いてとかではなくて、自分で書ける範囲のことで。

私は日本の文化を伝えるのが好きで、アメリカに行った時も日本紹介アルバムを作ったので、今回も作っていました。私が選択している日本の時間割を、こんな授業があるとか、学食はこんな感じとか、学校生活の様子をまとめたり、月毎の日本ならではの祭りをまとめて。なかなか積極的に行けないタイプなので、写真があると話しやすくなって。

初めて行ってみての印象は？

「プノンペンには都会だよ」って言われて新宿みたいなイメージをして行ったので、そういうのとは全然違うなって思ったんです。

交通量の多さとか、ルールとか大丈夫なのかな？というのが印象的でした。

以前、授業で雨季と乾季の生活みたいな DVD を観た時に、高床式が主流だと聞いていて、プノンペンに行ったら全然ないなって思っていました。それで地方に行ったら、本当に全部高床式でした。

印象的な授業は？

私は碑文の授業が好きで、全然読めなくて、わからなかったんですけど、カンボジアの学生も最近、一から習い始めたものだから、より一緒に学んでいる気持ちになりました。サンボー・プレイ・クック遺跡を觀に行った時に、碑文があって、1 年間に日していた交換留学生が碑文が好きみたいで、いろいろ説明してくれました。碑文は勉強したら楽しいんだらうなって思いました。

パーリ語とかサンスクリット語とかは、1 年間やっていたらしいので、みんなスラスラ読んでいたりして、すごいなって思いました。

たまに知っている単語が聞こえて、パーリ語だと音を聞けば分かって。聞こえてくることに感動していました。

クラスメートとはどんな会話を？

私から質問できるのは「家は大学の近くなの？」とか「どうやって学校に来ているの？」くらいで。実家から 2 時間くらいかけて来ている子もいて、家が牧場で牛を育てているみたいでした。

料理も習ったようですね？

予定されていなかったんですけど、たまたまホテルの隣りで「料理教室やっています」という看板を見て、それでポー先生が家でやろうって、先生の友人のお宅で教えてくださって。ココナッツミルクと魚の蒸し物とマンゴーサラダと、バナナとココナッツミルクのスイーツを作りました。

忘れられない思い出、出会いなど

2週間しかいなかったんですけど、クラスの一員になれたという気持ちになって、本当にみんなが優しくて。授業が分からな
いとか困っている感じがすると、みんな寄ってきて、助けてくれたりして。本当にまた会いたいなって思います。

お世話係みたいな感じで私の隣りに座ってくれた子には日本語の教科書みたいなものを滞在中に作ってプレゼントしたん
です。日本にも来たいと言っていたので、「あいうえお」から手書きで徐々に作って、簡単な会話の文章などを書いたりして。
後で「あいうえお」と自分で書いたのを写真撮って送ってくれて。ちゃんと活用してくれていて、本当に作ってよかったなって思
いました。

SV で得た体験は、今後の人生にどんな強みがあると思いますか？

自分が専攻で学んでいて、「行ったことあるの？」って聞かれて、「実はまだないんです」と言うのがずっと嫌だったので、やっ
と行けてよかったなと思います。ポル・ポト政権時代の虐殺の慰霊塔にポー先生と一緒に行って、直に経験した人の話を
聴けたり、観光で行くよりは詳しいことが知れたと思います。実際に行ってみて、こういうことを感じたという経験を一つ持つ
ことができました。将来、自分がこれをするんだと決めた時に、「私が大学でやったことはカンボジア」と言えるきっかけにはな
ったかなと思います。

SV を検討している後輩たちへ

日本でやっているだけだと、「これ、本当に意味あるのかな？」っていう気持ちになってくる時期でもあると思います。行って、
実際に現地の人としゃべったりすると、勉強の成果を実感できて、学んでいてよかったと思うので、行った方がいい経験に
はなるんじゃないかなって私は思います。

②2017 年度派遣（2018 年 2 月）

-プログラム参加報告 1：深い海を遊泳できるまで

野崎翔太

聞き取ることもままならないほどのカンボジア語が自分の周りで交わされる様を、「カンボジア語のシャワー」と形容する人がいたが、それはシャワーと呼ぶにはあまりにも無慈悲なものだった。

それはまるで深さも広さもわからない大海原といったところで、初めは嬉々として飛び込むものの、やがて疲れ果て、どこにも足がつか



ないことにただひたすら不安になるばかりだった。泳ぎ疲れた私たちは溺れないようにと懸命に浮かぼうと試みるも、容赦のない波が流れるたびに塩辛い海水が口や目に入った。なんとか岸に上がる頃には疲弊しきって、飛び込んで入って行った時のような体の熱はすっかり海水に奪われ、もう 2 度とこんな冷たい海水に入るものかと心に決めても、次の日にはまたその海水に浸からなければならなかった。

決してショートビジット自体が、そのように荒波に揉まれるような苦行だったのではない。私にとって初めてのカンボジア訪問は、簡単に言葉にしてしまうのでさえ憚られるほどに楽しい時間だった。カンボジア語力がたとえ拙いものであったとしても、困ったら英語に頼ればどうということもなかった。私の言うカンボジア語の大海原とは、王立プノンペン大学での授業のことである。

私たちは別に泳げないというわけではない。2 年間ひたすら水練を積んできていたはずだった。ショートビジット前には王立プノンペン大学での授業のための集中講義も受けていた。しかし実際に大海原を遊泳するには、私たちの力は不十分だった。現地で交わされていたカンボジア語は非常に早く、しかも聞きなれない話し言葉が多かった。その上発音も日本人用にはっきりと話してくれているわけでもない。泳ぎなれない海水の、あまりの流れの速さと冷たさに圧倒されるがままで、カンボジア人教員と学生が互いに何を話していたのか、全く理解することができなかった。

しかし何も僕らはなんの補助もなく、カンボジア語の海で浮かんでいたのではない。もちろん始めの数日はそうだったが、や

がて王立プノンペン大学の友人たちが手を差し伸べてくれた。その大海原出身の彼らは浮かぶのに精一杯の僕らに目を掛けてくれた。聞き取れないほどの早いカンボジア語を、ゆっくり、わかりやすい言葉で説明してくれた。授業中の説明の全てを説明することはできなかったものの、授業の休講の連絡や、授業の大まかな説明をしてくれた。それだけでなく、日本の気候や日本語のことなど、色々なこ



とについて積極的に尋ねてくれた。彼らの優しい救いの手は、冷たい海水に熱を奪われた体を温めるには十分すぎるほどだった。そんな優しさを向けてくれたにも関わらず、私のカンボジア語力不足ゆえに、日本人はだいたいみんな天然パーマという嘘の説明をしてしまった自分の愚かさを呪いたい。

特に休みの日を私たち日本人学生に割いてくれ、最後には空港まで見送りにきてくれた同じクラスの3人には感謝してもしきれない。その中の1人であるチャントラは来年外大に来るというので、彼女が日本語の大海原で苦しんでいるようであれば、今度はこちらが力になりたい。

大海原で漂う私を助けてくれた人の中には、懐かしい顔もあった。昨年度の夏まで交換留学で外大で日本語を学んでいたソピアと、その次の枠で来たピセイと現地で再会することが出来た。日本を離れてしばらく経ったにも関わらず、彼らの日本語のなんと流暢なことか。1年間、日本語の大海原で泳ぎを学んだ彼らの日本語は、競泳選手の泳ぎよろしく美しいものだった。

さらに3ヶ月前、ショートステイプログラムで数週間だけ日本に来たカンボジア人学生たちとも再会することができた。その中には私が担当した男子学生ペアトラもあり、数ヶ月ぶりに、まさに正反対の形で再会を果たすことができた。日本に来ていた時、ペアトラは日本人の手を存分に借りながら、自分から望んで何度も日本語の大海原に潜っていた。彼のその真摯な姿勢は見上げたものであり、私たちが教えた日本語の言葉もすっかり覚えていた。それだけでなく帰国後も日本のことを学んでいるようで、どこで覚えたのか、「恋するフォーチュンクッキー」を知っているとされたときには驚いた。

救ってくれたのはカンボジア人だけではない。カンボジア語科の同期であり、半年前から王立プノンペン大学に派遣留学している同級生も、私たちを助けてくれた。半年ぶりに再会した彼は、もうすっかりその大海原に適応していた。プノンペンのことをまるで住み慣れた街のように理解し、なんの障害もなくカンボジア人とカンボジア語で話す彼の姿は、まさに一人前

のダイバーのようであり、私たち日本人学生にとってどれほど心強い存在であったか。

彼曰く、彼も最初のうちは全くカンボジア人のカンボジア語が全く理解できなかったという。留学して3ヶ月ほど経過したあたりから何と無く理解できるようになったという。始まりは同じだったはずなのに、彼と私の間にいつの間にこんなに差がついたものか。もちろん彼は同期の中でも頭一つ飛び抜けていたが、私が簡単な質問でさえゆっくり言ってもらわなければ理解できない一方で、彼は躊躇なく海に飛び込み、補助もないままカンボジア語の海を泳いで一回りしてしまう。

これまでただひたすら、仰々しい表現で、どれだけカンボジア語が理解できなかったのかを綴ってきたが、私がカンボジアへのショートビジットで得たものはなんだったのか？このまま終わってしまったのは、まるでフェイスブックの友達を数名得ただけのカンボジア旅行をして来た輩として、偉い人に怒られてしまいそうである。私はカンボジアで、カンボジア語に対する驕りを失ったと同時に、カンボジア語を学ぶモチベーションを得たと感じる。

この2年間外大でカンボジア語を学んで来た。このまま卒業すれば、私の学歴という形で、カンボジア語を学んだ事実は残る。しかしこのまま、練習用のプールを少し泳げることに甘んじていれば、私は所詮井の中の蛙。カンボジア語を知っている程度の人間で終わってしまう。今回のショートビジットで、私はいかにカンボジア語の大海原において無力な存在なのかを痛感した。

きっとあの大海原で悠々自適に暮らすには、それ相応の訓練が必要なのだろう。今回私たちがあの海に浸かっていたのはほんの2週間だけであった。私たちはカンボジア人の助けを借りながら、ただ深く冷たい海を浮かび、時折少しだけ潜ってみるので精一杯だった。しかし何ヶ月もの間浸かっていたら、冷たく塩辛い水に体は慣れ、深さと広さがわかり、誰の手を借りることもなく長く深く潜ってられるのかもしれない。それは、すっかりカンボジア語の大海原の一流ダイバーになった同期や、日本語の海に1年間浸かったカンボジア人留学生たちが証明している。私は海に足繁く通い、何ヶ月もの間海で水練を積むことはできないが、たとえ教室という名の流れのないプールであったとしても、そのプールを長時間、何不自由なく泳げるまでになれば、海を泳げるようになるのも容易いことなのではないか。

私はショートビジットで、残りの2年間をどう過ごすべきかを理解することができた。私がやるべきは、あの冷たく、不安を掻き立てるほどの深い海を思い通りに遊泳できるようになるまで、カンボジア語を学び続けるのみである。

-プログラム参加報告 2：カンボジア、満ち満ちるもの

吉川美由貴

初めて行ったカンボジアに満ちていた空気に触れて得た、新鮮さが忘れられない。言語学習や地域基礎などの授業を通して学んでいたカンボジアについてのあれこれに、色付けをしていくような 2 週間がこのたびのショートビジットだった。

期間中朝早くから車で通学していたが、プノンペンの街は私たちが通る頃には既に活気に満ちていた。道端の露店はその多くが開いていて客を呼び込み、道路にはバイクやトゥクトゥク、車、自転車が溢れていて、物売りの人々は大きな荷物を頭に載せたり手に持ったりしてしきりに道行く人に声を掛けていた。初めて王立プノンペン大学を訪れた時にも、よくこんな早い時間からたくさんの学生が登校してくるものだといき驚いてしまった。朝からひどく渋滞していて遅刻しそうになったりと良いことだらけというわけではないが、はつらつと機能する街や動き回る人々を見て、カンボジアという国の活力、元気をひしひしと感じた。



元気と言えば、プノンペン大学で知り合った学生たちも皆生き生きとしていて友好的であった。授業は本当に難しくて呆然としてしまう程だったが、周りの友達が手助けしてくれるおかげでなんとか受け切ることができた。特に学級委員であった友達は几帳面で丁寧で、ハリのある向上心が見て取れるような素敵な女の子だった。カンボジア語と英語で、授業内容の詳細をたくさん教えてくれたり話しかけてくれたりした。彼女は東京外大にて学びたいと言っていたので、私の在学中に来てくれればいいなと強く願っている。

学生たちは勉強以外でも、観光地を一緒に楽しんでくれたり、昼ごはんを誘ったりしてくれた。もっと長くカンボジアに留まっていたいと思わされた一番の理由がこの学生たちとの交流かもしれない。今でも数人の学生たちと時々 SNS でやり取りしている。面倒を見てくれた学生たち以外のクラスメートもみんな



な、授業中先生の呼び掛けや質問に対してよく発言していた。学生が先生から笑いをとる場面も頻繁に目撃し、教室内の活気を毎日肌で感じた。

さまざまな授業を受け、そのたび面白いと思う部分がたくさんあったが、大学でやったことで一番心から楽しかったのは、伝統楽器の体験だった。今年度卒業するという2人の学生が指導してくれたが、教え方は日本のそれと共通点・相違点があった。

まず共通点は、どの楽器も指導者が先に弾いて見せてくれて、私たちがそれを真似て練習していたということだ。私は弦楽器は弾きこなせず、まるでドラえもんやしずかちゃんがヴァイオリンを弾いている時のようになってしまったが、打楽器はこれまでやってきた楽器の弾き方を応用させ弾くことが出来た。

相違点は、このたび教わったのが伝統的な楽曲であったためか、指導の際楽譜が用いられなかったことだ。どの楽器の指導に際しても、学生たちが旋律を何度も繰り返し口ずさみ、それを覚えつつ楽器の練習をする、という方法で指導は進んでいった。当然初めて聴く曲であるし、楽譜なしの暗譜と練習を同時進行させるというのはなかなか難しかった。指導してくれる学生2人はどちらもかなり我慢強かったと思う。

しかしそのような個々の練習時間が終わり、全体で合奏した時は本当に胸が高鳴った。学生たちはアドリブで美しい旋律を入れてくれたし、私たちも心から合奏そのものを楽しめたように感じた。学校で木琴の弾き方を習ってからは、観光地2ヶ所でも木琴を弾いた。クロマーやその織り方を見学できる公園のような場所に木琴が置いてあり、同期2人と弾かせてもらった時は、周りに集まった人達が同じ旋律の歌を私の木琴に合わせて歌ってくれて、そこで歌詞があることを知った。他の人たちも手拍子で盛り上げてくれたりして、楽しいひとときを過ごした。あの場に音楽を通して生まれた温かい空気と一体感を忘れることはない。



このたびのショートビジットでは、カンボジアに来てやりたかったと同時にやるべきであったことである、カンボジアの過去に直接触れることもできた。このたび訪れたトゥールスレンもチュンエクのキリングフィールドも、ありふれた街中や自然に溢れた場所にあってもやはり、日常とかけ離れた空気が流れていた。それは、数々の資料に触れ現場に佇んでも尚、想像を絶する悲

しいことの起こった場所の運命であり、今も祈りに満ちている場所として当然のことなのかもしれない。

トゥールスレンでもっとも印象に残っているのは、狭い狭いレンガ造りの監獄だ。監獄、と呼ぶにしてもあまりに粗末なつくりのそれは、光のあまり差し込まない薄暗い場所だった。そこで聞いたオーディオからの解説は、トゥールスレンに連れてこられた時のことを語っているものだった。粗野な兵士達に殴られ蹴られ、笑われながら人々は連行されてきたという。道中どれほどの不安や怒りを感じていたか分からない。そしてこの監獄に粗雑に押し込まれたのだろう。私はレンガ造りの壁の囲いの中に一歩足を踏み入れ、少しの間監獄の内側を見渡してみたが、気が狂いそうな程の圧迫感と謎の焦燥感、恐怖感に襲われた。ここにいた人々の気持ちなど想像するまでもなかったが、私が感じたものの何倍もの負の感情に襲われただろう。

トゥールスレンとキリングフィールド、両方で目にした忘れられないものは、犠牲となった人々が死の直前まで身につけていた衣服だ。ぼろ布のように見えるそれらは、よく見ると大人のもの、子どものもの、男性のもの、女性のもの、の判別がつく。ぼろ布のようなのは元々貧しいからなのか連行されてきたことによるのか分からないが、いずれにせよその衣服たちの様が心に刺さることに変わりはない。土にまみれた衣服の切れ端は、キリングフィールドの地面のあちこちから覗いていた。

また、キリングフィールドでは、「子どものつけていたピアス」も置いてあった。その数日前に訪れたロシアンマーケットにて、走り回っていた愛らしい子どもたちの耳にピアスがあるのを目にしていたからか、そのピアスの置いてある場所からしばし動けなくなった。今私が念願叶って訪れたカンボジアと、このピアスをつけていた小さな子の命が奪われた過去のカンボジアは繋がっているのだと、当たり前のことを再認識した。そのピアスをしっかり目に焼き付けてからその場を立ち去った。

カンボジアにて始終感じていた空気は、新しいものを生み出す生き生きとした力と、過去のことを色褪せさせてはいけませんが、しかし傷跡は癒えてほしいという祈りに満ちていた。余所者である私は、余所者であるからこそそれらを強く感じ取った。カンボジアについて多くの人が抱いている、そして子どもの頃の私も抱いていた内戦や地雷のイメージは、確かに間違いではないがそれだけではなかった。老いも若きも朝早くから街を動かし、のびのびと笑い合う姿もこの国の真実なのではないかと思った。そんな人々の姿にもっと触れていたいし、あわよくば私も景色に組み込まれていたいと感じた。カンボジアの今も昔ももっと知りたいと思えた、大変有意義なショートビジットであった。

-プログラム参加報告 3：初めてのカンボジア

小山秋穂

今回のショートビジットで、私は初めてカンボジアを訪れた。2 週間のショートビジットを通して、カンボジア語を大学 2 年間で必死に勉強してきた成果を現地で発揮すること、実際にカンボジアの生活を見て経験することで、その現状と今後の課題を発見することが私の目標であった。滞在中は大学での講義を受けるだけでなく、課外活動や現地の NGO 団体を訪問するなど様々な経験をすることができた。それらを通して学んだことを述べてい。

王立プノンペン大学での講義

私たちはカンボジア人の学生と一緒に教室に入り、彼らと共に 2 週間授業を受けた。先生の話すカンボジア語はとても速く、聞き取ることはほとんど出来なかった。授業内容もサンスクリット語、パーリ語やインド文学など初めての内容ばかりで、事前学習をしてい



たが、内容を理解することは難しかった。しかし、隣の席の学生が分からないことを質問すると、ゆっくりと教えてくれて、会話のきっかけにもすることができた。初めは、突然授業に参加する私たちを受け入れてくるかとても不安だったが、カンボジアの学生はとても優しく迎えてくれた。特に仲良くなれた友達は休日の観光にも来てくれて、授業外でも楽しく交流することができて良かった。移動のバスの中でもカンボジア語を話すことができ、語学の勉強にもなる機会を沢山得られた。また、カンボジアの学校については日本と異なる点がたくさんあった。授業中は沢山の学生が発言をしていて、日本のように受け身の授業ではない。さらに、大学だが制服があったり、クラスがあったり、日本の高校のようであった。

大学での講義を受けて感じたことは、カンボジアは未だに識字率が低く、教育が整っていないと言われるが、現在大学に通っている学生はとても優秀で勉強熱心であることだ。日本の大学生と異なり、将来の生活のために一生懸命に大学で勉強している印象を受けた。今後このような学生が国の発展を担っていくのだと強く感じた。

カンボジアで OG 訪問

授業がない日には、カンボジアで活動する NGO 団体と AEON MALL Phnom Penh で働く学部の先輩を訪問した。

一つ目の訪問先の NGO 団体、FIDR（公益財団法人国際開発救援財団）では役員の人の話を聞きみんなの前で

プレゼンをしたり、定期会議の様子を聴講したりした。医療分野、農業分野、食品衛生分野などで様々な活動を行っていて、現在取り組んでいることや直面している課題について知ることができた。また、NGO 団体で働くことについてはっきりとしたイメージが無かったが、実際にお話を聞いたことで、企業で働くこととの違いや自分の考えを実際に活動に反映させることができる喜びがあることなどを知ることができた。

さらに、子供に英語を教える NGO 団体、AHHA Education でインターンシップをしている先輩も訪問した。お金がなく学校に行けない子供に無料で英語教育を行ったり、16 歳以上の子供には全寮制で英語や仕事に必要な会計、パソコンなどの知識を教えたりしていた。約 2 年間のプログラムを通して子供達が就職するところまでサポートする彼らの活動は素晴らしいと思った。近年はカンボジアでも英語教育の需要が高まっているということで、日本も英語教育を見直さなければいけないと感じた。また、首都であるプノンペン内でも学校に行けないほど貧しい子供が沢山いることに驚き、そのような子供達に将来良い仕事に就くチャンスを与えることは重要で意味のあることだと実感できた。

AEON MALL プノンペンでは、カンボジアに進出した日本企業がどのような人々を対象に経営し、どのような課題があるのかを学ぶことができた。AEON 内は日本と同じようにとても綺麗でカンボジアだとは思えなかった。さらに、従業員の働く様子もとても丁寧で、従業員用通路からお客さんの前に出入りする際に立ち止まって一礼していることに驚いた。このように日本の企業が働く際のマナーや礼儀をカンボジアに広める役割も果たしていた。また、貧しい人々が多いカンボジアで、どのような人々が AEON を訪れるのか疑問を持っていたが、お客様の多くは中間所得者層であることを知り、プノンペン内の貧富の差を強く感じた。東京のような高層ビルがあれば、その下では物乞いをする子供達がいますますその差が広まってきているような印象を受けた。



虐殺の場に立って

もう一つ私が訪れたいと思っていた場所は、ポルポト時代の収容所と虐殺の地である。現在は博物館のようになっていて、一般の人にその悲惨な歴史が公開されている。授業や本を通して知識はあったが、実際に現地を訪れると肌で当時の雰囲気を感じ、寒気がした。山積みの骸骨や生々しい写真にとってもショックを受けた。日本語の音声ガイドを聞くことができ、カンボジアの歴史についてさらに理解が深まった。同じ過ちを繰り返さないためにも多くの人にその歴史を知らせるこ

とが重要で、カンボジアを訪れたら行くべき場所だと思った。

カンボジアでの生活

私たちは 2 週間ホテルに滞在し、昼食と夕食は主にカンボジア料理のレストランに行った。1 年前、外語祭で販売したカンボジア料理を現地で食べることができ、とても楽しかった。私たちは衛生面を心配し行かなかったが、道ばたには沢山の屋台が並び、現地の人々でいつも賑わっている様子や沢山のバイクで入り乱れ、渋滞する道路の様子はカンボジア人の生きる活気で満ちあふれているようだった。また、高層ビルも建ち並び、新しい商業施設などの建築工事があらゆる場所で行われていて、カンボジアが現在発展の段階にいることが見てとれた。

しかしその一方で、道路に信号がなく、交通ルールが全く守られていないことや、道路やトイレの衛生状態が悪いこと、地元の店では税金が含まれていないなど、沢山の問題があることに気がついた。特に、私自身も滞在中にお腹を壊して病院に行くことになり、身をもって衛生の悪さを体験した。このように、実際に現地で生活することで、学校では学べないカンボジアの様子を知る事ができ、とても良い経験ができたと思う。

まとめ

ショートビジットを通して、カンボジアについて沢山の事を学ぶことができた。2 年間学んできたカンボジア語が現地の人に通じた時はとても嬉しく、相手も私たちがカンボジア語を話せると分かると、楽しんで私たちと会話をしてくれた。しかし、会話が聞き取れないことや分からない単語も沢山あることにも気づかされ、もっと勉強しようという気持ちにさせられた。また、初めて発展途上国を訪れて沢山の事を学ぶことができた。新しいショッピングモールや高層ビル、高級住宅街を次々と建設しているが、そのような場所に行くことができない貧困層は沢山いる。道を歩いていると貧困と発展が同時に見て取れることが不思議な景色だった。首都プノンペンでもお湯が出ない家があったり、プノンペンから車で数十分の距離でさえ未だに雨水を生活用水に使っている家があったりする様子を実際に見て、日本での生活の違いに衝撃を受けた。国の大部分を占める貧困層の生活の質を改善するためにはどうすればよいのか考えるきっかけになり、公共的なルールを守ることや衛生管理の知識などの重要性を教



育することが大事だと感じた。

2 週間はとても短かったが、大学での勉強だけではなく、遺跡巡りや企業、NGO 団体への訪問など沢山の経験ができ、濃密で充実した時間を過ごせた。今回のショートビジットで得たことは卒論の構想にもつなげることができ、参加をして良かった。

-プログラム参加報告 4：友達としてのつながり

都崎理菜

授業への参加

今回のショートビジットでは王立ブノンペン大学の国文学科に入り、現地の学生と机を並べて授業に参加した。碑文やサンスクリット語、パーリ語、意味論など日本語で授業を受けても難しいと感じるものをカンボジア語で受けるため、理解にはとても苦労した。



先生が何を言っているのかわからない、教室全体が笑いに包まれても全くわからない状況、黒板に書いた文字ですら読むのに一苦労など、初めは授業が苦痛なものだった。しかし何もわかっていないと気づいてくれたクラスメイトの助けにより、授業は少しずつ理解できるようになり、楽しいものになっていった。

板書を懸命に読み解き書き写しているとクラスメイトがチェックし間違っている文字を教えてくれたり、サンスクリット語、パーリ語ではカンボジア語に翻訳したノートを見せてくれたりと、自分たちも授業を聞かなければならない中、私も授業に参加できるようサポートをしてくれた。

最終日には、少人数の授業を経験することができた。先生に日本の文化や東南アジアのイメージについて聞かれ、今まで覚えてきた単語を総動員させ精一杯答えた。それまでの授業ではほとんど発言の機会是与えられなかったため、初めて先生の質問に答えることができとても嬉しかった。単語力が乏しいため言いたいことを伝えることも難しかったのだが、何より敬語を使いこなせず、おそらく先生にため口で話してしまったのだろうと反省している。

みんなでシェア

教室や食堂で誰かが食べ物を持っているとみんなでシェアをするという光景をよく目にした。教室では休み時間にバナナチップや揚げた芋などを一人が買ってくると、それを机の上に広げみんなでシェアする。手を出せない私たちには机まで持ってきてくれて、食べていいよと毎休み時間様々なものを食べさせてくれた。パンなどであっても一切れずつちぎってシェアしてくれた。

食堂では一人一品ずつ頼むのではなく、適当に何品かのごはんを人数分注文し料理はみんなで分け合って食べる。そうすると自然に「これおいしい」などと会話がはじまり食事の場が明るくなり、楽しい時間となった。様々なカンボジア料理を

食べる機会があったが、カンボジア人の友達とシェアして食べたカンボジア料理が一番おいしく、思い出深いものとなった。

職場見学

授業は午前で終了するため、午後は様々なアクティビティーが企画されていた。その中で先輩方が働いている 3 つの異なる分野の職場見学をする機会があった。AEON MALL Phnom Penh、NGO 団体 FIDR（公益財団法人国際開発救援財団）、英語学校 AHHA Education と、同じカンボジアを活躍の舞台としていても、様々な活躍の仕方があるのだと強く感じた。

イオンでは日本企業がカンボジアへ進出している姿を見ることができた。日本とは異なり若い客層が主であるため、若い世代に合ったお店やゲームセンターなどが充実していた。日本企業であっても日本のやり方を押し付けるのではなく、進出する国に合わせた戦略を練る大切さを学んだ。

FIDR は自分たちの国を良くしていきたいと考えているカンボジア人が活躍できる場所であると感じた。NGO 団体というと日本から支援を行うというイメージが強くなってしまいが、日本人が行う支援ではなく現地の人へ直接行う支援の形の良さ、大切さについて考えさせられた。その国のことを一番理解しているのはその国の人であり、現地の人が行くことでより変わっていく世界が FIDR にはあった。

AHHA はユニークな形態を持つ英語学校だった。住み込み式とパートタイム式の入校スタイルがあり、住み込み式では食事代のみを支払い、学校に住み込んで学んでいく。20 ヶ月のプログラムで英語学習から始まり、職業訓練や他州でのインターンを経て卒業していく。パートタイム式では 1 日 3 時間の英語学習が行われ家から AHHA に通う。学校内の公用語は英語で先生同士や生徒と先生が英語で会話している姿が多くみられた。新しい教育の形を知ることができ、とても良い経験となった。

カンボジアで活躍したいと考えるとどうしても偏った活躍方法ばかりがイメージされていたが、今回先輩方の様々な活躍を見ることができ、視野を大きく広げることができたためとても貴重な経験となった。

研修

職場見学以外にも様々な研修地へ行った。博物館では授業で実際に学んだサンスクリット語が書かれている碑文があった。たった 2 回の授業では何も読むことはできなかったが、授業中に自分が懸命に書き写した文字が石に彫られていると

思うと不思議な気持ちになった。

ウナロム寺院は外大の授業で読んだ「ソパート」という小説で主人公ソパートが修行を行っていた寺であった。小説の世界と自分の見ている世界がつながり感動した。

サンボー・プレイクック遺跡や王宮へは、以前に外大に留学していた学生やクラスで特に仲良くしてくれていた学生と一緒に来てくれた。一緒に写真を撮ったり、様々なむずかしい説明をわかりやすく簡単にしてくれたりと教室ではできない経験をたくさんできた。

授業中や休み時間は会話する時間が限られているが、鑑賞時間やバスでの移動時間はたくさん会話することができ、とても楽しい時間であった。理解できるようにゆっくり簡単な言葉で説明してくれたり、私の言いたいことを一生懸命理解しようとしてくれたり、少しずつ仲良くなれていることを実感できた。

伝統楽器の体験をする機会も与えられた。楽器の才能が全くない私にとってカンボジアの伝統楽器はとても難しいものであったが、言語以外のつながりを得られたように感じた。後日自分の体験した楽器を目にすると、この楽器やったことあるよと会話が広がった。今回どの楽器もマスターすることができなかったため、いつかマスターし、カンボジア人の前で披露できるまでの腕前にしたいと思っている。

留学生から友達へ

最初に教室に入ったとき、留学生としての好奇心な目を向けられた。決してそれは冷たいものではなく、受け入れようとしてくれている温かいものではあったが、留学生である私たちがカンボジア人学生と「友達」になることは難しいだろうと思った。しかし他愛もない会話をたくさんしていくうちに、冗談を言い合う関係にまでなることができた。もちろん留学生としてたくさん助けてもらったり、カンボジアについて様々なことを教えてもらったりしたが、それだけでなくちょっとした冗談を言い合って笑い合うことができるようになっていった。

最後には、たった 2 週間前に出会ったばかりである私たちのためにサプライズで空港までお見送りに来てくれ、離れてしまうのがさみしいと言ってくれた。正直 2 週間という短い期間でここまで仲良くなれるとは思っていなかったため、とても嬉しかった。日本に帰ってきてからも頻繁に連絡を取っている。またカンボジアに行く日までにカンボジア語力を向上させ、より楽しく会話できるようになりたい。



③2018 年度派遣（2019 年 2 月）

-プログラム参加報告 1：出会いと別れを大切にするカンボジア

尾形多愛

2 年間、大学でカンボジアについて学んでいたことを自分の目で確かめ、カンボジア語をどれくらい理解し、自分のカンボジア語もどの程度理解されるのか検証することが主な目的で、2 週間のショートビジットに参加した。



クラスメートたちと（筆者前列左から 2 人目）

大学での授業

月曜日から土曜日の午前中は大学に通い、2 年生の授業に参加した。

授業の初めに、日本のことや私たちの滞在期間などについて尋ねてくる先生もいらっしゃった。そのときには先生の質問に答えることができたため、授業も理解できるのではないかと思っていたが、やはり日常的に使用されない学術的な語彙は、事前準備をしていたにしても、完全に理解することは難しかった。もっとカンボジア語ができていたら歯がゆさを感じた。

東南アジア文化の授業では先生がプロジェクターを利用して授業を行っていた。驚いたのはパワーポイント内で使用されている言語が英語だったことである。東京外国語大学では日本人の先生が日本人学生を対象と



王立ブノンベン大学（RUPP）構内で

して主に日本語で授業を行う場合、パワーポイント内は日本語である。しかし、その授業ではカンボジア人の先生がカンボジア人学生を対象として主にカンボジア語で授業を行っているのに、パワーポイント内で使用されている言語は英語であった。使用言語とパワーポイント内の言語が一致しない授業を受けたのは初めてであった。カンボジア人同士でもインターネット上でやり取りをするときにカンボジア文字ではなく、ローマ字を使用していることもある。このようなことが学生が日常的にカンボジア文字を使用しないことにつながっていくのではないかと思った。

お気に入りの場所

午後は授業がないため様々な場所に出かけた。私のお気に入りの場所はワット・ブノム寺院である。ワット・ブノム寺院は周りに木が茂っていること、小高い丘の上にあることから周りの喧騒から離れられる場所であった。カンボジアについてから

三日後にその地を訪れたのだが、それまでの忙しさ、疲れ、緊張感を少し取り除いてくれるような場所だった。お寺の周りの遊歩道沿いには椅子が置かれ、家族、老人、カップルが座って各々リラックスして楽しんでいた。私が訪れた日は祭日だったためたくさんの人であふれていた。お寺内部の入り口付近で楽器を演奏している人々がさらに活気を高めていた。仏像の前には様々なお供え物が並んでいたが、その中にお札で作られた花が供えられていた。日本と同様、賽銭箱のようなものがあり、お金が無防備に置かれているので、誰も盗まないのかと心配になった。日本国内ではゴミの不法投棄が多い地域に鳥居を建てた所、不法投棄する人が減ったという例がある。カンボジアでも仏像の前にあることが盗みの抑止力になっているのかもしれない。

困ったこと

一番困ったことは、食事面である。私は滞在中は食あたりしないように食べ物に細心の注意を払っていた。つまり道端の屋台や市場のものや学食のものではなく、レストランや学内カフェのものを食べていたということである。カンボジア人学生は私と遊びに出かけたときには屋台や、市場や、学食でご飯を食べようと誘ってくれたが、私は断ることが多かった。本当は一緒にご飯を食べて仲を深めたいのにそうできないことの悲しみと、せっかく誘ってくれたのに行けなくて申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。一番心苦しかったのは友人が私にサンドイッチを作り、学校に持ってきてくれたときである。カンボジア語であまり詳しく説明ができなかったことから、誤解を招いてしまったかもしれない。将来長期的にカンボジアで過ごすことがあったら、食あたりしないような体になって友人が作ってくれたサンドイッチを喜んで食べられるようにしたい。

出会いと別れを大切に

2 週間通して感じたことはカンボジア人は別れのときを大切にしているということである。2 週間しか授業に参加しなかったものの、同じクラスの多くの学生は私を友達だと言い、最後の授業のあとに別れの挨拶をする時間を設けてくれた。ただ授業で一緒にいただけであるが、手紙を書いてくれたり、別れの言葉をかけてくれた学生もいた。日本人は 2 週間の出会いで泣いたりしないことが多いが、カンボジアの人たちのように出会いと別れを大切に生きていくことも大切だと思った。今回のショートビジットで出会った友人たちにまた会いに行きたいと強く願っている。



ワットブノム寺院で供物を捧げる人

-プログラム参加報告 2：エネルギーに満ちた国 カンボジア

田村玄

今回のショートビジットで私は初めてカンボジアを訪れた。入学して約2年間カンボジア語を勉強してきた自分がどこまで通用するかを確認する絶好の機会であると同時に、現地でしか味わえない空気や文化を存分に味わってやろうという気概で臨んだ。

王立プノンペン大学

平日の午前中は基本的に王立プノンペン大学の授業を受けて過ごした。留学生用のクラスというのは無く、一般学生のクラスに短期編入という形であった。授業はもちろんカンボジア語で、先生の話すスピードがとても速い上に、板書もお世辞にも見やすいとは言えないもので、はっきり言って全く内容は理解できなかった。かろうじて聞き取れた単語で何となく授業の雰囲気を感じ取るのが精一杯であった。

大学の授業で大きな驚きだったのは、時間に関してかなり寛容だということだ。また先生の質問に学生が積極的に挙手をして回答したり、ディスカッションの時間に活発な意見交換があったのはとても印象的で、日本との違いを感じた。

滞在中には絆フェスティバルという日本の文化を紹介するイベントが開催されており、カンボジアでの日本という国の知名度を認識したと同時に、その割に日本に何があるかは浸透しておらず、特に「キズナって何？」と訊かれたときは戸惑ってしまった。そして上手く説明できない自分に失望した。



伝統料理の白魚のココナツミルク蒸し

暗黒の歴史

カンボジアと聞いたら多くの人がアンコールワットを思い浮かべるだろうが、今回はアンコールワット抜きのカンボジアとなった。では、次にカンボジアに関して有名なものといえば、ポル・ポト時代の大量虐殺ではないだろうか。悲惨な時代ではあったが、それを抜きにしてカンボジアを語ることはできないのもまた事実である。私たちはポル・ポト時代の強制収容所であるトゥール・スレン(通称 S21)と処刑場であるチュン・アエク(通称キリングフィールド)を訪れた。チュン・アエクで一番記憶に残るのは、やはり何百何千と頭蓋骨の並んだ慰霊塔である。頭蓋骨は年齢別で並べられており、ありとあらゆる世代の人

間が殺害されたことを実感した。また近くにはキリングツリーと呼ばれる一本の木があり、そこでは幼い子供が母親の目の前で木に叩きつけられて殺害されたという。子供の痛みはもちろん、その母親の怒りや悲しみは私の想像を遥かに超えるものであろうし、もはやそのような言葉で収まる感情ではないかもしれない。

トゥール・スレンはプノンペン市内の普通の街なかに突如として現れた。元が高校ということもあり外観はさほど仰々しいものではなかったが、一歩建物の中に足を踏み入れるとそこは高校とはかけ離れた場所であった。通気用の窓は鉄板で塞がれ、かつての尋問室の床には血痕が残っており、パネルには部屋で殺害された収容者の写真が展示されていた。また収容区画には何百人もの収容者の写真が展示されており、そのほとんどが彼らと同じかそれよりも若い年齢の看守に拷問の後殺された。そしてその看守ものちに罪を着せられ処刑されたという。その処刑方法も、銃声が周りに聞かれないように主に農機具などを用いたものであったという。その話を聞いたとき、人間はそこまで非道になれるのかと戦慄した。またこのような悲劇が起こったのがわずか 40 年ほど前ということに驚くと同時に、同じ過ちを絶対に繰り返させないために語り継ぐこと、命を貴ぶことの大切さを改めて感じた。

食と宗教

食に関しては、東南アジアならではの香草や調味料が使われた独特の風味があるものの、とても美味しく頂けた。街のあちこちにある屋台がとても印象的で、特に唐辛子で真っ赤に味付けされたであろうあの虫は次回是非トライしたい。また屋台ではないレストランも多くが東南アジア料理を提供する店ばかりで、ファストフード以外のいわゆる欧米料理の店は全くと言っていいほど見られなかったのも意外であった。

カンボジアではたくさんの寺院を訪れた。その大きな特徴は派手ということである。講堂内の壁や天井には色鮮やかな絵画が描かれ、金色の仏像が何体も置かれていた。そしてその後ろには電飾が後光のように輝いていた。日本の仏像とは 180 度違い、御仏の威光をこれでもかと分かりやすく表現しており、ある意味これも宗教が生活に与えている影響の違いなのではと思った。かつてポル・ポト時代に宗教は否定され寺院は破壊されたが、それでも現在は宗教は復活し生活の一部として根付いている。日本では宗教が倦厭されがちだが、拠り所となる正しいものがあるというのは強さでもあったと感じた。



プノンペン市内にあるウナロム寺院

2週間という短い期間でカンボジアのすべてを知ることは出来なかったが、今まで学んできた成果を生かした課題を見つけることが出来たという点では大きな意義があった。同時にカンボジアの成長と課題という点も見つけることが出来た。街はエネルギーに満ちていてまさに成長の熱を感じとれたが、一方で例えば、ものごとが時間通りに進まないことや、高層ビルが続々と建てられるかたわらで物乞いをする人もいるという所得格差の問題、交通渋滞やごみ捨てのマナーが悪いことは今後カンボジアが発展する上で大きな問題になっていくだろう。そうした問題を解決するにはまだまだいろんな支援が必要であり、それを言語という面でサポートする力を自分は持っていることを認識した。より具体的な目標を持って今後の学習に生かしていこうと思う。

④2019 年度派遣（2020 年 2 月）

-プログラム参加報告 1：百聞は一見にしかず

安齋ゆら

はじめに

私は今回初めてカンボジアを訪れた。事前に様々なことについて調べ、心の準備をしておいたというものの、初日から独特の混沌さに圧倒されることとなった。とはいえ、「珍しくイキイキしてる」と周りの人から言われるほどカンボジアの異文化を楽しむ、最終的にこのショートビジットが有意義なものであったという感想を得ることができた。このエッセイでは、2 週間を振り返りながら感じたことや得られた知見などに触れていきたい。

王立プノンペン大学（RUPP）での生活

授業に関しては、初日で挫折してしまった。最初の 1 週間は、ネイティブでない私が現地の学生でさえも難しいと語るような難易度の授業に参加するのは不適切であると合理化したり、このプログラムが用意されているということは、2 年生のこの時期にはこの授業を理解できるほどの語学力が要求されているのではないかと落ち込んだりするだけであった。

しかし、カンボジア人学生たちの多くは私たちに友好的で、先生がかなりの速さで話しているときもノートを見るか聞いてくれたり、一緒に写真を撮ろう、Facebook を交換しようと誘ったりしてくれたおかげで、前向きな気持ちになり、授業の内容を少しずつ理解できるようになった。

ここでは、理解しようとする姿勢の大切さや話すことで得られる様々な気づきのほか、不安や孤独を抱える留学生に現地学生が関わっていくことの重要性を実感した。これまで多忙さや恥ずかしさを理由に留学生と交流を持てないでいたが、積極的に関わっていききたい。

貧困

外国人向けのホテルやレストランを使用し、移動も基本的にプノンペン内をバンで回るだけであったため実感する機会はそれほど多くなかったが、子どもや年配者が物乞いをする姿を度々目撃した。特に、何人かの子どもは渋滞の合間を縫って物乞いをしており、危険さや保護者の存在などが心配になる一方、ただ傍観するだけの自分にもやるせなさを感じた。

またイオンプノンペンにて、貧困によるいじめや重労働にあえぐ家族の映画を観た際も、この映画がカンボジア人にとって単

にお涙頂戴ものなのか、あるいは社会制度の不備を投げかけているものなのか考えることとなった。

貧困が不幸であるとは必ずしも言えないが、現在どれほど貧困によって医療や教育などを受けられずに苦しむ人や受けたと思う機会も与えられない人がいるのかを知りたいと感じた。また、社会問題を考えるにはまだまだ知識が不足しているため、カンボジアや日本を中心にどんな社会体制や付随する問題があるのか積極的に学んでいきたいと思った。

ポル・ポト時代

赤色クメール時代について理解するために、キリングフィールドとトゥールスレンを訪れたが、2つのことに衝撃を受けた。

まず、“悲惨であった”の一言で片付けてしまっていた赤色クメール時代の具体的な凄惨さである。高く積み上げられた頭蓋骨、彼らが着ていた衣服、ひきつった顔で写る人々、血の跡、そして様々な虐殺の様子など、めまいがするような恐怖感に襲われた。群集心理や追い詰められた状況下の人間の恐ろしさや、略奪と破壊を繰り返す人間が存続していく意義について深く考える機会となった。

そして、トゥールスレンの虐殺の図の前で笑いながら自撮りをする中学生が複数いたことである。私が小中学生だった頃にもそのような人がいたが、久しぶりに目の当たりにしたために、校外学習で浮かれてしまったのか、平和な時代が訪れた証だと捉えていいものか、また悲惨さを実感していないのかと困惑した。中学生のおふざけをここまで危惧する必要は無いかもしれないが、歴史上風化や人命の軽視によって悲劇が何度も繰り返されていることを忘れてはならない。いかにカンボジア人の中に平和意識が保たれていくのか、歴史教育はどうなっているのか調べていきたい。

遺跡・彫像

数々の遺跡や彫像を見学し、その技術の高さや美しさに感動し、畏敬の念を抱いた。一方で、内戦下で多くが破壊され失われた事実に胸を痛めた。戦争は様々なものを奪うということを改めて実感した。

体調不良

腹下しをしたことは言うまでもないが、おそらくエアコンに直にあたっていたことが原因で肺炎寸前の気管支炎になってしまった。プノンペンには日本人の先生が運営する病院があるためそれほど心配する必要は無いが、様々な活動に参加できなかったことが心残りである。疲れや環境の悪さなど、体調不良を避けることは難しいが、万全の予測と準備を持ってまさか

の事態に備えることが大事だと感じた。

おわりに

上記以外にも、宗教や治安、食事、物価、文化、そしてカンボジアから見た日本など沢山の刺激的な経験や為になる情報を得られた。これでカンボジアをわかった気にならず、長期滞在やさらなる学習を目標としたい。また、これからも百聞は一見にしかずを信条に、自分の目で見たことや経験したことを大切にしていきたい。



トゥールスレン博物館にて

-プログラム参加報告 2：私が二週間で得た経験

本間瑠璃

私が今回ショートビジットに参加した理由は 2 つある。1 つ目は自分の語学力の現状を知ることである。日本では社会でカンボジア語を使う機会がほとんどない。二年間学んできた中で、学習のモチベーションの維持が難しいと感じることもあった。そこで今回、2 週間思う存分にカンボジア語に触れることで、何が今の自分に足りないのか、また、私がカンボジア語を学ぶことで将来、何かに貢献できないかなど、課題や目標を見つけることで残りの大学生活の中で有意義にカンボジア語を学びたいと考えていた。

2 つ目は文化を感じることである。単なる観光目当ての旅行では目の当たりにしにくいものを 2 週間という期間で現地の学生と交流したり、ローカルなお店に立ち寄ったり、観光客としては行かないような州で首都とは違ったカンボジアの雰囲気を感じることでより深く文化を学ぶのだ。

学校生活

私は 2 週間、朝 5 時半に起床し 7 時からの授業に参加した。授業が始まると、ものすごいスピードでカンボジア語が聞こえてきて、あっという間にカンボジア語で黒板が埋まっていく。先生やクラスメイトが話すカンボジア語は聞き取るのがとても難しく、単語も分かるものが少なく、所々しか拾えなかった。もちろんそれでは授業は理解できず、最初は絶望を感じた。自分が今まで習得してきたカンボジア語能力はなんだったのかと心折られた事件だった。

しかし、私は一緒にショートビジットに参加した仲間とそのような愚痴混じりの現状を話すうちに、現地の同じ学年の授業に最初からついていけるのなんてあたりまえではない、自分の分かるところから少しずつできることを増やしていくべきだと気づいた。そこでクラスメイトに先生が何を言っているのか簡単なカンボジア語で教えてもらうなどしてなんとか 2 週間を乗り越えた。ある日、先生の雑談でクラスメイト達がなぜ笑っているのかわからなかった時、クラスメイトに話の内容を聞いてみたら意外とくだらない内容だった。先生がおっしゃっているのは、専門的な内容だけではないとわかったその瞬間、諦めずにもっと耳を傾ければ自力で理解できることも実は潜んでいるのではないかと思えたことと、その後の授業に向かう姿勢は、今振り返ればとても自分のためになったと思う。



食事

私はカンボジアに行ったら一度は屋台のものを食べてみたいと思っていた。しかし、屋台のものは、食べ慣れていない私たちにとっては食あたりの可能性が高かった。ある日先生が屋台のパンを夕食にしようと言ってくれた。私はお腹を壊すのが怖かったが、この2週間で現地の食事にお腹を慣らし屋台のものを絶対に食べようと思っていたので嬉しくもあった。見た目は素朴だが、とても美味しく、感動した。再度カンボジアを訪れた際はもう一回食べたい、忘れられない味である。

また、ある日、屋外のレストランで食事をした際、隣のグループの机に熟れたマンゴーが落ちてきたのがとても印象的である。ワイングラスがいくつか割れてしまっていたが、客も特に騒ぐことなく、また、店員も「落ちちゃいましたか」と言わんばかりの平然とした対応でおもしろかった。マンゴーやパパイヤなど、日本では普段目にしない木の実が日常生活の周りにあふれていることもとても魅力的だった。

コンポンチャムにお出かけ

これまでに交流した留学生と共に、プノンペンから車で3時間ほど走ったところにあるコンポンチャム州に出かけたことはとても楽しい思い出として鮮明に記憶に残っている。自分がまだカンボジア語が全然わからない一年生の時に仲良くしてくれた友人や、少し語彙量が増えて簡単な会話が楽しめるようになった二年生の時に仲良くしてくれた友人との再会がなにより嬉しかった。特に一年生の時に仲良くしてくれた友人と再び会話できたことは、懐かしく感じるとともに、初心に帰ることができ、自分はなぜカンボジア語をもっと勉強していきたいと思ったのかを思い出し、これから先の学習へのワクワク感を大いに感じた。



路上の屋台のパン



道端に生えているパンの木



コンポンチャム州の観光名所

また、この日は観光客に花やタランチュラを売り歩く子供に会い、カンボジアの生活の現状を目の当たりにしたり、使ったことのないタイプのトイレに出くわしたりと、日本では確実にできない体験をした。様々な感情が行き交い、忘れられない日となった。

私はこのショートビジットに参加してよかったと心の底から思う。2週間で学習への姿勢・意欲が変わったのが自分でも分かる。自分が将来カンボジア語を使うのかはまだわからないが、選択するべき時に多くの選択肢を用意できるよう、せっかく二年間学んできたカンボジア語を、もっと実用できるように今後学習しようと思った。

また、日本とは全く違う生活様式を多く目の当たりにしたことで、文化の多様性を学びそれを受け入れることができた。貴重な2週間となった。



みんなで市場へ制服を買いに行った（筆者中央左）

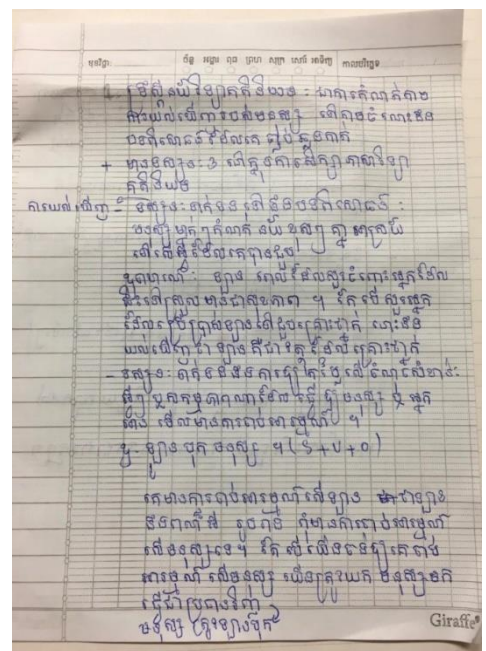
-プログラム参加報告 3：尊敬の国

川越 風歩

「カンボジアって何がある国？」よく人から聞かれるが私は決まって「アンコールワット！」と誰もが知っているような回答をしていた。でもカンボジアを専門に学んでいるからには皆が知らないような魅力を知る人になりたい。そんな気持ちで今回のプログラムに参加した。

王立プノンペン大学での授業は、内容を完全に理解することはできなかったが、現地の学校に通えたことは私にとって新鮮で刺激的なものだった。あまりきれいではないし、冷房もないから少し大変だと聞いていたのだが、思いのほか教室はとても快適。比較的暑くない時期だったこともあるが、風通しがよく、冷房がなくても十分に涼しく、朝 7 時の授業開始から 10 時頃までは長袖の制服を着ていても鳥肌が立つほど。どんなに拭いても毎朝登校すると机が砂だらけで、そこからも風通しのよさを感じた。風だけでなく授業中に鳥が入ってくることもあって、室内に居るのに外を感じられる教室を私はとても気に入った。

そして、2 週間の授業を乗り切ることができたのは何よりもクラスメイトのおかげ。皆親切に解説をしてくれ、自分用の板書とは別に、私用に易しいカンボジア語で授業の要約を書いてくれる子もいて感激した。日本語の単語を覚えようとしてくれたり、放課後や帰国後までも気にかけて連絡をしてくれたり 2 週間私たちを温かく迎え入れてくれた彼女らの優しさには感謝の気持ちでいっぱい。



同級生のノート

この 2 週間を通じて私はカンボジアを「尊敬の国」だと思った。特に今回の滞在では仏教と先生への尊敬を強く感じた。この寺院でも、仏様の前に来ると若い人からお年寄りまで皆慣れた様子で平伏して手を合わせる。学校では、授業中に教室を出入りするときは皆先生に向かって合掌し、名前を呼ばれた時の返事も「はい」ではなく「はい先生」。カンボジアでは教師は尊敬される地位にあると聞いたことがあったが、それを現地で実感した。

一番驚いたことは、自分の先生でなくても相手の職業が先生ならば先生と呼ぶこと。今回私たちをサポートしてくださった

カンボジア人の先生は、レストランに行っても博物館に行っても、先生だということが分かったと周囲の人々から先生と呼ばれていた。どれも日本にはないことだったので新鮮に感じたが、よく考えれば日本の礼儀を重んじる文化なども尊敬の一種の形だと思う。クラスの子に日本は何の宗教を信仰するのかと聞かれた時、宗教は特にないと答えたらあまり納得がいかないような表情をしていた。日本のことも勉強し、次に会う時は日本人の宗教観やどんな形で尊敬の心を示すのかといったことを彼女が納得できるまで説明したい。

カンボジアでの日々は日本とは生活リズムも食も異なるが、私は日本より調子がよく感じるほど快適に過ごすことができた。私の 2 週間の元気の源は何と言っても食事。カンボジア料理はとても私の口に合い、食事は至福の時だった。お気に入りの料理もいくつか見つけることができた。1 つ心残りなのは虫を食べてみればよかったなということ。カンボジア人の友達は皆美味しいよと勧めてくれたのだが私には勇気が足りなかったことを後悔している。

それから、カンボジアは朝が早い国。朝方の生活も私の快調の要因の 1 つであろう。毎朝 6 時半にホテルを出発すると、既に工事現場では作業が行われ、交通渋滞も始まろうとしている。私はカンボジアは朝が早く夜はひっそりしていると想像していたが、実際はプノンペンには日没後も交通が多く、道路沿いは飲食店や屋台の明かりが灯り、人も多く集まって活気ある様子。プノンペンはあらゆる場所が建設ラッシュで、多くの日本人が想像するよりもずっと大都会。まさに発展の真ただ中にいるということを肌で実感した。

貧困や衛生などの問題は残っているとしても、遠くない未来にあっていう間に日本は追い抜かれてしまうだろうと思うほど勢いがある街だ。しかし不思議なのはそれほど活気があるにも関わらず、ゆったりと時間が流れているように感じる場所。平日の朝や夕方に大人がスポーツを楽しんでいることや、日が暮れ始め涼しくなると広場や川沿いでくつろぐ人が大勢いることが印象的で、このようなリフレッシュの時間が日本人にもあればよいのにと羨ましく思った。

カンボジアの新たな魅力を知ったことと多くの新しい友達ができただけが今回の一番の収穫。クラスメイトたちがハグをして「9 月に会おうのを待っているね」と言ってくれた時が来てよかったと心から思った瞬間だ。秋からの留学中に遊ぶ約束もしっかり取り付けてきた。次会う時は彼女らにも私が留学に来てくれてよかったと思われるよう、カンボジアについてさらに熱心

に学ぶ人になり、成長した姿を見せたい。そして今後は「カンボジアは人々の心の温かさと笑顔に溢れ、これからの可能性を無限大に秘めたエネルギーな国」と人に教えたい。



王宮前の階段にて（筆者右から2人目）

-プログラム参加報告4：カンボジア語を学ぶ意味

三好佐夜子

ボーディング・ブリッジへ足を踏み出すと、茹だるような暑さが襲ってきた。私は、2年間のカンボジア語学習で手にいれた自信とともに入国審査へと向かった。数えてみると活気溢れるこの国に来るのはもう3度目になるが、今回は2週間のショートビジットでカンボジア語を勉強するのが目的だった。2年間も勉強してきたのだから、この旅は難なく終わるだろうと呑気に構えていた。そうしてショートビジットの幕は開いた。

結論から言うと、先ほどの自信は誤りであった。私が持っていたのは自信ではなく自惚れだったのだ。登校初日、早くも私はそれに気づかされることとなる。

教室に入ると学生がちらほらと座っていた。私たちが席に着くと、近くにいた女子学生が話しかけてきた。日本では、カンボジア人留学生と積極的に交流しているし、会話もある程度できるようになっていたため、難なく会話ができるのだろうとタカをくくっていた。しかし、かけられた言葉はもはや暗号だった。何度か繰り返し聞き、ようやく「日本でどのくらいの期間カンボジア語をやっているの？」と尋ねられていたことがわかった。私が話しかけても、発音が悪いのかうまく聞き取ってもらえないこともあった。挙句、先生が話していることは大事な内容なのか、雑談なのか、すらわからなかった。作り笑顔で一日を凌いだ。今まで自分が日本ではできていると思っていた会話は、日本に来たカンボジア人が私たちに配慮して会話してくれていたお陰だということにやっと気づいた。そしていきなり目の前に立ちはだかった壁に、自信を完全に失ってしまった。

この壁を越えるため、私はカンボジア人学生と授業前に雑談をしたり、授業中にわからないことを聞いたりと積極的に交流するよう努めた。その成果か、ショートビジット後半にはカンボジア語でのスムーズな会話が増えた。先生が話していることはわかる単語だけでも聞き取ろうという姿勢で授業に臨み、ディクテーションには必死に食らいついた。完全には理解できなかったが、少しずつ指示がわかるようになっていった。元々友人だったカンボジア人からは「話すのが上手になったね」と声をかけてもらった。2週間やそこらではカンボジア語が格段に上達することはなかった。が、この2週間の自分の努力する姿勢に抱く感情は、自惚れではなく自信なのだと胸を張って言える。

ところで、「何のためにカンボジア語を学んでいるの？」と人に聞かれることがよくある。カンボジア語を学んでいる人が珍し

いからであろう、この2年間で数え切れないほどこの疑問を投げかけられた。カンボジア語を学びたいと思ったきっかけは一度旅行で訪れた時に魅力を感じたから、である。だが、何のために、と問いかけられると答えられなかった。「カンボジア語なんてやって将来何になるの？」と笑われ悔しさに唇を噛むこともあった。

さて、留学中に話を戻そう。私たちは留学中、課外活動としてプノンペンの街を巡った。街の端々にはカンボジア語表記の看板や交通表記があった。市場を訪れた時は店員とカンボジア語で話すこともあった。そんなある時、ふとカンボジア語が生きていて感じた。今まで、学校で作文をしたり、文学作品を読んだり、授業の一環としてカンボジア語に触れてきた。だがカンボジアではカンボジア語の世界が学校の外にまで広がっている。授業ではなく生活とカンボジア語が結びついているということは私にとってやたら新鮮に感じられた。街に繰り出せば、あちらこちらでカンボジア語が飛び交っている。生きたカンボジア語を人々は話し、そして私も話している。冷静になれば当たり前のことだが、私は一種の感動すら覚えた。これまで散々カンボジア語を学ぶ意味について質問してきた人々がよぎった。この感動は君たちにはわかるまい。将来の役に立たなくたっていい。カンボジア語を学習してきた意味はこの感動のためにあったのだ。



度々話しかけてくれたカンボジア人学生と

2週間で私は自信を身につけ、カンボジア語を学ぶ意味を見出した。これからの大学生活でもカンボジア語やカンボジアの社会と関わっていくことになるだろう。その関わり合いの中で、ショートビジットの2週間で得た自信とカンボジア語を学ぶ意味、この二つは忘れないように過ごそう。遠く離れたカンボジアに想いを馳せながら、私は心にそう固く誓った。



全授業終了時（筆者は左から2人目）

-プログラム参加報告 5：実際に見て聞いたカンボジア

小川志季

今回のショートビジットに参加したことで、私は初めてカンボジアに行くという機会を得ることができた。実際に現地に行って生活してみると、「日本では知ることのできないカンボジア」について知ることができると分かった。本稿では、私が 2 週間のショートビジットで感じたことについて述べる。

カンボジアに着いて最初に思ったことは、カンボジア（特にプノンペン）が私の想像とは全然違うということだった。数々の高層ビル、渋滞するほどの交通量、夜になっても賑やかな街。プノンペンは同じ首都でも東京と違ってのどかな場所かなと思っていたため、その街並みがあまりにも私の想像とかけ離れていてとても驚いた。

プノンペン大学では、カンボジア人学生が学ぶクラスに入って 2 週間の授業を受けた。1 月の集中講義で事前にどんなことをやるのか知っていたとはいえ、先生の話すスピードについていけなかったり、先生の手が読めなかったり、何の話をしているのが全く分からなかったりという問題に直面し、自分のカンボジア語運用能力に自信がなくなってしまった。しかし、ここで諦めたらカンボジアまで来た意味がないと思い、とりあえず先生の話に耳を傾けて知っている単語だけでも聞き取ってみようとした。

最初のうちは全く聞き取れないことが多かったが、だんだんなじみのある言葉は聞き取れるようになっていった。また、日本人学生のことを気遣ってくれる先生や学生もいた。「先生の話分かった？」と質問してくれたり、質問をしたら簡単な単語で説明してくれたりする学生がいて、授業の時に助けてくれた時はとても嬉しかった。質問した時に相手に自分の質問がなかなか通じない時もあったが、自分の知っている表現をいろいろ使ってなんとか伝えることができた。カンボジアの大学で講義を受けるということを通して、今まではカンボジア語が身近にない場所で学んでいたのだから実際にカンボジアに来て自分のカンボジア語が通じないということは当たり前だということを実感した。

今回のショートビジットでは、現地の大学で授業を受けるということだけではなく、カンボジアの文化や歴史、社会についても多くのことを学ぶことができた。特にキリングフィールドやトゥールスレンではポル・ポト時代の日本では学ぶことのできないカンボジアの凄惨な歴史を学ぶことができた。この 2 つの場所には外国人観光客がたくさんいたが、カンボジアで起こった悲

劇についてもっと世界中の多くの人が知ることができるといいなと感じた。

伝統衣装を着たことと踊りを体験したことが楽しかった。カンボジアの民族衣装はメイクが濃く、アクセサリもたくさんつけ、とてもきらびやかだった。日本の着物とは全く雰囲気が異なる装いであり、今回カンボジアの伝統衣装を体験することができて嬉しかった。

踊りは「ココナツダンス」というものと座りながらやる踊りを体験した。この２種類の中でも特にココナツダンスが楽しかった。ココナツダンスはヤシの実を使って行うものだが、ペアの人とヤシの実をぶつけ合ったときの「コツン」という音がとても面白かった。日本にはヤシの実を使って行うダンスはないので、とてもカンボジアらしさの現れたダンスだと思った。また、劇団員たちが劇を見せてくれた。セリフがなく、動きや表現だけでストーリーを表していたが、１つ１つの動きが大きくてしなやかだったため、登場人物たちの感情や場面の状況が非常に分かりやすかった。

カンボジアで２週間を過ごしてみて、カンボジアについて知らなかったことやこれから自分がすべきことが分かった。私は今までカンボジアに行ったことがなかったため自分の想像の中でのカンボジアしか知らなかったため、今回は本当のカンボジアを知る良い機会となった。また、もっとカンボジア語における豊富な語彙の必要性を感じたため、これからその点も視野に置いてカンボジア語を学んでいきたいと思う。



中央市場で（筆者中央右）



プノンペンの街並み

-プログラム参加報告 6：カンボジア語を学ぶということ

田中茜里

私は2月8日から23日でカンボジア・プノンペンでのショートビジットプログラムに参加しました。今回はこのプログラムを通して私が感じた、「カンボジア語を学ぶということ」について書きたいと思います。

私にとって今回のカンボジア渡航は2度目でした。ですが、プノンペンについて早々、昨年の夏に訪れたときとは違う街並みに驚きました。中国語の看板が溢れた建設ラッシュの街。空港から滞在先までの道のりは建設中の高層ビルばかりでした。何よりも昨夏と比べて増えていたのは、ショートビジット中にもたくさんお世話になった、タピオカ屋さんでした。

私はこのショートビジットに向け、ひとつ目標を立てていました。それはショートビジット中に日常生活で使える便利なカンボジア語の単語をマスターする、ということです。単語を覚えるのが苦手な私は、毎日メモ帳とペンを持ち歩いて、知らない単語を耳にしては綴りと意味を書いて覚えるようにしました。結果、一番メモしていたのは食べ物関連と体調に関する語彙ばかりで、いかにその2つがカンボジアでのショートビジットで大切なことだったのか思い知らされました。

大学の授業は「日本から来たカンボジア語を学ぶ人用」というような授業ではなく、国文学科の通常授業に混ざる形だったので、本当に苦労しました。カンボジアのみならず、東南アジアやインド、宗教についての知識がある前提で進み、単語も専門的なものばかりだったため、座って聞いているだけでもヘトヘトになりました。そして何よりも生徒や先生が話すカンボジア語がとてもはやいため、隣の子に質問してもその回答を聞き取れず、1つの質問につき3回以上は聞き直していました。それでもクラスメートはとても優しくフォローしてくれたのでなんとか授業の概要程度は掴むことができました。

そんなこんなで乗り切った2週間で、私は「カンボジア語を学ぶということ」について考えました。大学に入学してから私は何度も「どうしてカンボジア語を勉強しているの？」と尋ねられてきました。日本人の中にはカンボジア語を一生耳にするこ
ともない人もいます。日本にいたってなかなか使う機会はありません。ではなぜ私はカンボジア語を学ぶのか。これまで私は自分の興味のある東南アジアについて深く学ぶためにカンボジア語を勉強してきました。実際にカンボジア語で文献を読んだり、翻訳したりすることで学んだことは数知れぬほどあります。ですが、今回のショートビジットで新たにカンボジア

語を学ぶ意義を見出すことができました。それは大事な友人たちと繋がる、ということです。話そうと思えばお互いに英語で会話することもできます。それなりに意思疎通をはかって仲良くなることも出来るでしょう。それでも私はカンボジア語で会話する、ということに大きな意味があると思います。言語を学ぶことは相手の文化を理解したいという気持ちを伝えることになります。なので英語で話すよりずっと相手が心を開いてくれるように感じます。そしてそれは逆も同じです。胃腸炎になり、病院で点滴をしてもらうとき、はじめは看護師さんと英語で会話をしていました。しかし、私が少しカンボジア語を話すと看護師さんは私でも分かる簡単なカンボジア語で優しく言葉をかけてくれました。英語を話すときのちょっとしたよそよそしさがなく、私を気遣ってかけてくれる言葉の1つ1つが、私自身にとってもすごく心に響きました。

今回のショートビジットでカンボジアの人々とふれあい、文化の違いに戸惑うことは多くありました。ですが、そのような文化の違いに触れる中で、言語の重要性にも改めて気づかされました。たとえ文化の違いがあろうとも、その壁を乗り越えるための言語という武器が自分にはある、ということにも気づくことのできたショートビジットでした。これからも友人、先生方との繋がりを大事に、カンボジア語を学んでいきたいと思います。最後に、引率してくださったソバタナ先生、プログラムのためにたくさんの準備をしてくださった先輩方、先生方、そしてプログラム中いつも楽しませてくれたみなさん、本当にありがとうございました。



大学にて（筆者左端）

⑤2020 年度派遣（2021 年 2 月）：オンライン短期留学実践報告

2021 年 2 月 8 日（月）から 2 月 12 日（金）まで、大学の世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」によるオンライン短期留学プログラム（カンボジア）が行われ、16 名の本学学生が参加した。

なお、本プログラムにおける王立プノンペン大学の協力については、本学ウェブサイトをご覧ください。

・[王立プノンペン大学副学長が本学学生に向けてオンライン講演、林学長と懇談](#)

・[Vice President of Royal University of Phnom Penh Gives Online Lecture to TUFS Students and Meets with President Hayashi](#)

今回は、オンラインによるプログラムであるからこそ可能だった試みが多く、履修した学生の学習の向上も見られたことで、まさに次世代型の留学プログラムとして成功したといえる。

1 オンラインで可能になったこと

- ・授業内容への集中（不測の出来事による支障がない）。
- ・カンボジア各地の訪問（移動時間がかからない）。
- ・字幕の配信（学生の理解を促すため難解な語彙の綴りや和訳をチャット機能で同時配信できる）。

2 プログラムの特徴

- ・下記のプログラムはすべてカンボジア語で行われた。参加者の半数が 1 年生だったため、2 年生とのペアワークを取り入れた。
- ・ユネスコの無形文化遺産に登録されている影絵芝居について、カンボジアで最も古い歴史を持ち知名度の高いティー・チアソー一座との 5 回のワークショップを行った。特に、演目であるラーマーヤナの語りを本学学生が担当し、それに合わせて、一座の方々が大型影絵を動かし、楽団が演奏するという実演は感動的であった。
- ・協定校である王立プノンペン大学の教員による講演や、同卒業生が勤務する中学校での研修を行った。
- ・タンデム学習として、カンボジア語による日本紹介のプレゼンテーションを行った。これまでの 5 年間に本プログラムに参加

した王立ブノンペン大学の学生、文化指導をお願いした影絵芝居の一座の先生方に対して、餅やおにぎりなどの日本的な食べ物、日用品、実演を伴った文化紹介を行った。

3 学びの成果

- ・カンボジア語で積極的に質問できるようになった。
- ・多様な方々とカンボジア語でコミュニケーションをとることができた。
- ・言語はもちろんのこと、カンボジアの文化、社会、歴史への関心、学習意欲が高まった。

以下に、参加した学生の声を紹介する。

<大型影絵のワークショップを体験して>

- ・これは人生において二度と体験することはできないような貴重な機会であるに違いないだろう。また、貴重な体験の中でさらに貴重な韻文の語りを担当することが出来たことは、今後の私のカンボジア語学習における大きなモチベーションとなった。
- ・実際に語りの発表をしてみて自分の声が影絵芝居に重なった瞬間は本当に感動して忘れられない。確かにカンボジア語初心者には語りは難しかったが、挑戦したことにはとても意義があったと感じている。
- ・先生方に丁寧に一節ずつ教えて頂き、意味合いの違いも確認していったことで、徐々に抑揚の機微に気を配れるようになっていった。最後に自分の語りの後に劇が始まった際には、自分も一座の一員になれたようでとても誇らしかった。
- ・一つの作品、一つの伝統に関わることができていることが強く感じられ、感動的だった。芝居に参加している時の、オンラインで繋がっていることを忘れるような芝居への没入感と、その中で感じた影絵芝居の美しさや力強さは忘れられない。
- ・先生方に「日本の音楽を演奏したことはありますか？」と質問をしたところ坂本九さんの『上を向いて歩こう』を演奏していただいたのだが、その音色に非常に繊細で音楽の美しさの万国共通性を感じて非常に感銘を受けた。

<日本紹介のプレゼンをして>

- ・カンボジアの方は熱心にメモを取り、相槌を打ちながら聞いてくださった。外国の方が自国の文化に興味関心を持ってくださることはとても嬉しいことだと実感した。

・ここで学んだのは、やはり相槌や質問をもらうともらった側もうれしいということだ。対話を行う際に相手とのコミュニケーションをより良いものにするためのコツもこのオンラインプレゼンから学び、これからの言語学習や社会活動等に活かしていきたいと感じた。

・この3回のプレゼンの中で学んだのは実用的な知識だけではない。何より、言語学習者としての「伝える」「伝えられる」ということの本質をあらためて確認することができた。

< 今後の学習について >

・先輩方と私のカンボジア語学習期間は1年間しか変わらないが、その能力の差に驚かされた。それと同時に、自分の1年後が楽しみになった。

・今回のオンライン留学では、カンボジアの伝統文化について学び、その在り方について考える良い機会となった。

・今回のオンラインショートビジットプログラムを通して、カンボジアについて学習するモチベーションを向上させたり、自分のなにかにある価値観に気づいたりすることができた。

・今回で得られた様々な知見を今後のカンボジア学習でも生かし、いつか渡航が可能になれば、実際にカンボジアへも訪れてみたいと思う。

・私たちの拙いカンボジア語にも先生方は丁寧に答えてくださった。このプログラムは言語運用能力向上のモチベーションにもつながったので、引き続きカンボジア語の学習にも力を入れていきたい。

< 中学校を見学して >

・今回はオンラインであったからこそ、画面越しに学校の内部の様子を見ることができ、カンボジアの生徒たちの普段の雰囲気も知ることができた。

・実際に中学校の図書館からzoomを繋いで話をお聞きした。ソピア先生の背後では図書館で主体的に勉強に励む生徒たちの様子が窺え、学習が非常に活発であると感じられた。

・今回のプログラムではカンボジアの教育の新たな一面を知ることができた。

・まさにこれからの時代に求められる「主体的な学び」というものが実現されているのだと感じた。

< 講演を聞いて >

・カンボジアは、ポル・ポト時代や内戦、貧困といったイメージを持たれやすいが、その時代を生きてきた人々は今の私たちと同じように、思い出して笑ってしまうような思い出を持っているのだと実感した講演だった。

< 遺跡を見学して >

・リアルな旅行をできるようになったら、ぜひプレア・ビシア寺院に行ってみたいと思う。それまでにカンボジア語の勉強を頑張り、次回はカンボジア語でガイドを聞き取れるようになりたいと思った。